

〒371 前橋市上永町6-6
前橋市教育委員会管理部文化財保護室
TEL 0272-31-9531

群馬県前橋市

堰 越 II 遺 跡

共同住宅建設に伴う発掘調査報告書

1988

前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

前橋市は、北に赤城山、西に榛名山を望む関東平野の北部を市域とした県都であります。北から南に貫流する利根川の清流は「水と緑と詩の町」を潤し、かつては「糸の町」として養蚕製糸で栄えてきました。今、北関東一の人口28万を擁し生涯教育都市を目指し教育、文化、商工業の調和のある街づくりが進められ、都市再開発事業、土地区画整理事業、前橋工業団地、住宅団地の造成事業など多くの事業が進められています。

当堰越Ⅱ遺跡の所在する利根川右岸も前橋都市計画元総社土地区画整理事業や民間の住宅開発事業が盛んに進められています。

この大友町8街区も、民間共同住宅の建設に先だって発掘調査を実施したもので堰越遺跡を初めに大友屋敷、同Ⅱ、Ⅲ遺跡・国府推定地内の寺田遺跡など多くの遺跡に近く、主に、平安時代の住居址6軒を確認し、数多くの出土遺物の中には完形や復元可能な土師器・須恵器・灰釉陶器など16点を検出しました。本報告書を刊行するに当たり建築主の後藤ノボル様を初め多くの方々から物心両面でのご協力を戴き厚くお礼申し上げます。この報告書がこの地域の歴史解明の資料の一助になれば幸甚であります。

昭和63年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 関口和雄

例言

1. 本書は都市計画法第29条の開発行為（共同住宅建設事業）に先がけた開発予定地の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は前橋市教育委員会のもとに組織された、前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長 関口 和雄）の委託を受け、スナガ環境測設株式会社（前橋市青柳町211-1 代表取締役 須永 真弘）が実施した。
3. 調査担当者 浜田博一（前橋市教育委員会管理部文化財保護室係長）
遠藤和夫（ 同 上 主任）
新保一美（ 同 上 嘱託）
金子正人（スナガ環境測設株式会社埋蔵文化財調査部長）
白石光男（ 同 上 第二グループチーフ）
4. 遺跡名、所在地、調査期間及び調査面積は下記の通りである。
遺跡名 堀越II遺跡 略称 62A-29
所在地 前橋市大友町8-6, 8-7
調査期間 発掘調査 昭和63年2月15日～2月26日まで実施した。
遺物整理 調査資料の整理まとめ、など昭和63年3月31日完了
調査面積 170m²
5. 本調査における出土遺物は、前橋市教育委員会に保管している。
6. 本書はスナガ環境測設株式会社埋蔵文化財調査部が作成に当り、編集総括を金子正人が当り、白石光男が執筆と構造のトレースを行った。遺物実測とトレースは小林康典、師崎はつ江、石井きよ子が当り、作業事務を柴崎信江が行った。
7. 測量業務の指導監督は須永真弘（測量士第52614号）が行なった。
発掘調査の安全管理は荻野博巳が当った。
8. 本調査に際して、多大なご協力を戴きました、開発行為者の後藤ノボル氏や地元市民の方々並びに調査及び整理に際して種々と御指導、御助言を賜った各方面の方々に心より感謝申し上げます。
9. 調査に参加した方々は次の通りであります。記して感謝致します。（順不同）
今井芳生、 板垣宏、 須永嘉明、 河西三明、 近藤充朗、
石川サワ子、 石島正二、 藤田光夫、 佐々木智恵子

凡例

1. 遺構の略号

H—住居址 D—土坑

2. 実測図の縮尺

全体図1/100 住居址1/60（カマド1/30） 土坑1/60 遺物実測図1/3

3. 遺跡の位置の基準 X=43130.00m Y=-70595.00m

基準点、国土地理院の三角点及び水準点

座標系 第四系

方 眼 4m間隔

等高線 10cm

4. 土層断面の土色名及び土器類の色調名は「新版基準土色帳」による。

5. 挿図中のスクリーントーンの表示は下記の通りである。



地山



焼土



灰釉陶器

目次

序

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と調査経過	1
第2章 環境と周辺の遺跡	1
第3章 調査概要	3
1 調査方法	3
2 基本土層	3
第4章 遺構と出土遺物	5
1 住居址と土坑	5
2 觀察表	11
第5章 まとめ	12
実測図(1, 2)	13
図版(1~5)	15

第1章 調査に至る経緯と調査経過

経緯

前橋市大友町8-6, 8-7に位置する本遺跡は開発行為者後藤ノボル氏から共同住宅建設の目的で、前橋市教育委員会に埋蔵文化財確認調査の依頼があり、前橋市教育委員会は依頼を受け昭和63年2月6日に試掘調査を実施した。その結果、奈良・平安時代の住居址が3軒確認されたため本調査の必要があると判断し、開発行為者と充分協議調整を計り、建設工事により遺構が損なわれる部分について発掘調査する運びとなった。

経過

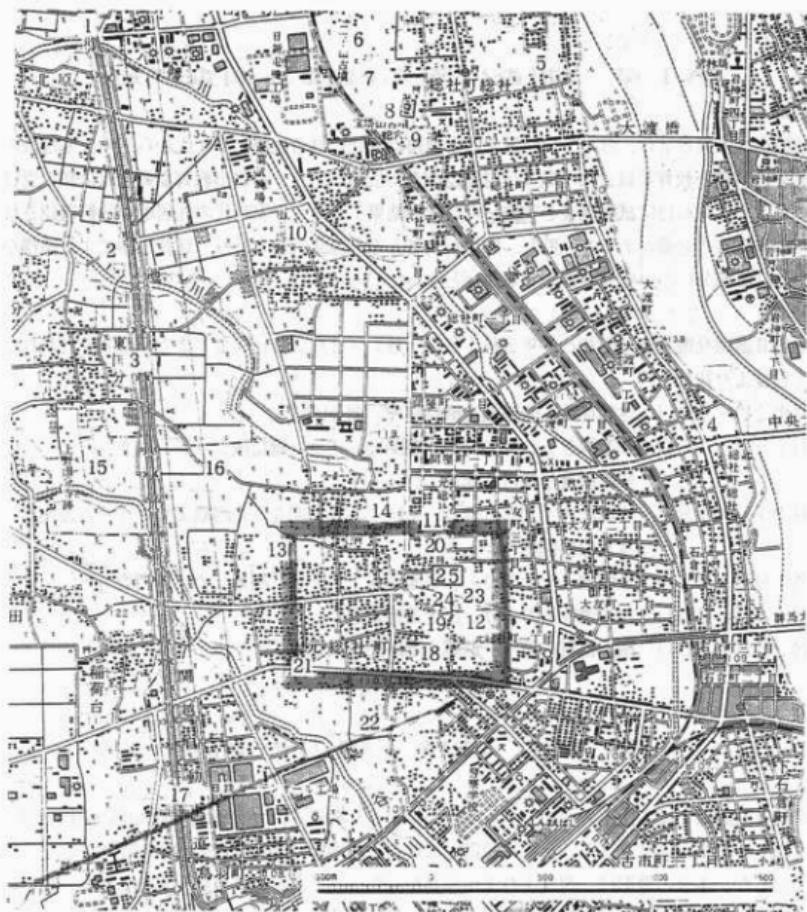
堀越II遺跡発掘調査は昭和63年2月15日(月)～2月26日(金)までの期間で行われた。
以下日誌より抜粋

- 2月12日～13日 休憩場所、発掘調査機材整理 調査区設定
2月15日～16日 作業員を入れての発掘作業開始、プラン確認後ジョレン掻き。
座標測量と杭打ち作業
2月17日～18日 住居址(1号～6号) 土坑(2基)調査 北西隅よりグリット設定
写真撮影開始
2月19日～22日 全体図(1:50)、平面図(1:20)測量、カマド調査
2月23日～24日 出土遺物取り上げ、出土遺物整理
2月25日～26日 搬出機材の整理、堀越II遺跡発掘調査終了

第2章 環境と周辺の遺跡

堀越II遺跡は、榛名山系の河川である牛池川によって形成された、平坦な微高地の前橋台地上に立地し、標高113～114m程に位置している。現地地形は開発のため表土が削除され低くなっているが、本来の地形は、現況より1m程高かったようである。本遺跡、東約200m付近には、市道大友西通線(通称産業道路)が通り、南には主要地方道(前橋・群馬・高崎線)が走っている。また、西約500m付近に上野国總社神社を望む。

本遺跡は上野国府域(推定)東限に位置し、周辺には国府に関連する遺跡が数多く存在する。閑泉樋遺跡・元總社明神遺跡・寺田遺跡では国府との関連が考えられる大溝が確認され、また大友屋敷II遺跡・大友屋敷III遺跡でも東西に走行する溝が確認された。天神遺跡・草作遺跡・元總社明神遺跡では、集落址が調査されており、近くには東山道や國分僧寺・國分尼寺跡等も存在する事から、この地域が古代上野国の中心的地域であったことが窺われる。



第1図 周辺の遺跡

1	下東西遺跡	2	国分境遺跡	3	国分寺中間地城遺跡	4	王山古墳
5	見山古墳	6	總社二子山古墳	7	愛宕山古墳	8	宝塔山古墳
9	蛇穴山古墳	10	山王廐寺跡	11	閑泉橋遺跡	12	元總社明神遺跡
13	草作遺跡	14	上野國府城(推定)	15	上野國分僧寺	16	上野國分尼寺
17	鳥羽遺跡	18	元慈社小学校校庭遺跡	19	寺田遺跡	20	閑泉橋南遺跡
21	天神遺跡	22	東山道(推定)	23	大友屋敷Ⅱ遺跡	24	大友屋敷Ⅲ遺跡
25	堰越Ⅱ遺跡						

第3章 調査概要

1. 調査方法

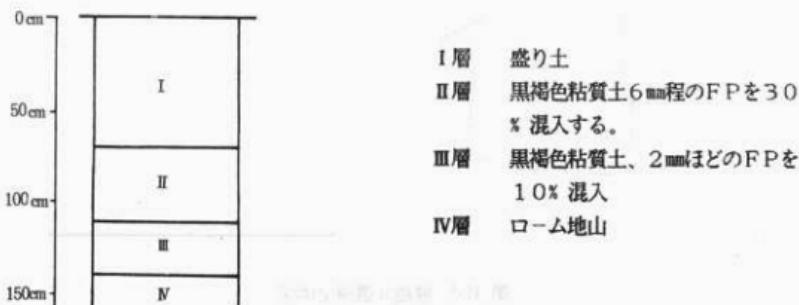
前橋市教育委員会は、発掘調査区域（面積約390m²）に東西・南北方向に各々2本のトレチを設定し、試掘調査を行った。この調査に基づいて発掘調査範囲を設定した。調査対象は、予定区域西部13m四方を対象に行い、面積約170m²を全面発掘するに至った。

調査区は表土を30～70cmの間で掘削排除しプラン確認後、測量基準軸を設定した。標高113.50m、座標をK-1地点でX=43,130.00m Y=-70,595.00mに設定しこれを基準に調査区を北西隅より縦線をA, B, C, D, Eまで経線を0, 1, 2, 3まで各々4m幅のグリッドで設定した。住居址はカマドを基準にベルトを設け土層観察を行い、カマドは残存状態の良いものは十字に切り、それ以外は半裁し調査した。

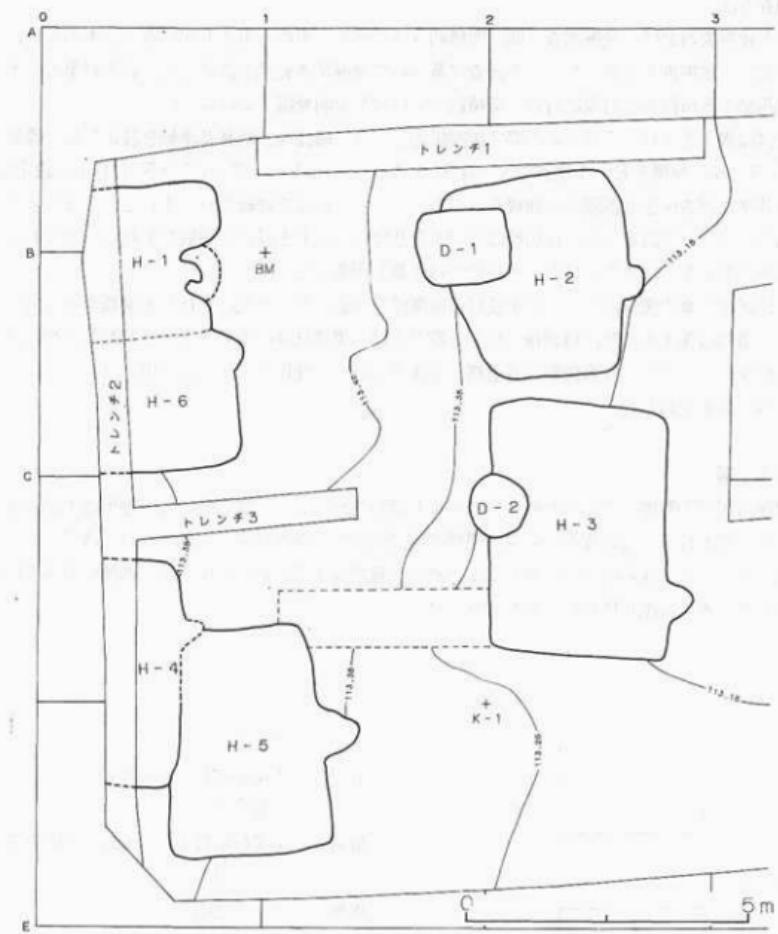
また住居址の重複関係はトレチを設け前後関係を調査した。土坑は半裁し土層観察後完掘した。出土遺物は覆土中の物は確認後一括して取り上げ、遺構に伴い重要であると判断した物は図面に記録後取り上げた。写真撮影は各遺構・全体等で行い、使用フィルムは白黒・リバーサル・カラー等で撮影記録した。

2. 基本土層

本遺跡は民間の敷地内であるためアスファルト舗装されており、舗装時には旧地形は大部分掘削されたと思われる。なお現況から見て遺構の確認面までの深さは東から西にかけて浅くなり、深い所で30cm、深い所70～80cmを測る。確認面までの遺物の出土は、西側から多く出土しており、表土掘削排除時に注意を要した。



第2図 基本土層



第3図 堀越II遺跡全体図

座標

K-1 X=4313.000m
Y=-7059.500m

標高

BM=113.50m

第4章 遺構と出土遺物

1. 住居址と土坑

a 1号住居址(第4図 図版1)

1号住居址は調査区北西隅コーナーに位置し、B-0グリット内に存在する。6号住居址と重複関係にあったが切り合い関係は明確ではなかった。規模は南北で推定3m、東西は調査区域外であるため不明。平面プランは方形に近いプランを呈すると思われる。壁高は北壁で13cmを測り直線的に立ち上がるが、南壁は明確ではない。床面は6号住居址と同一レベルであり、平坦で柔らかく所々に焼土や炭化物が含まれていた。柱穴は確認されなかった。住居址主軸方位はN-80°-Eである。

カマドは東壁中央部に位置し、残存状態は比較的良く袖石に凝灰岩の切り石が使用されていた。煙道は短く覆土中に焼土・灰・炭化物を多く含む。

出土遺物はカマド脇北壁コーナーから壺類がまとまって検出された。

b 2号住居址(第6図 図版1)

2号住居址は調査区北東壁ぎわに位置しB-2グリット内に存在する。1号土坑と重複しているが、本住居址との関係はないと思われる。規模は南北3.5m東西3.2mを測り平面プランはやや歪んだ方形を呈する。壁高は10~13cm程で立ち上がり、床面は平坦であるが西側で高くなる傾向にある。所々に焼土粒や炭化物を含む。床面積は約10.2m²を測る。柱穴は確認されなかった。住居址主軸方位N-87°-Eである。

カマドは東壁中央やや南よりに位置し残存状態はそれほど良くない。袖石は凝灰岩の切り石が使用されたと思われる。煙道は短く覆土中に焼土・灰・炭化物等が層状に堆積していた。カマド周辺には炭化物が厚く堆積しており火の使用頻度が高かった事が窺われる。

出土遺物は全く検出されなかった。

c 3号住居址(第8図 図版2)

3号住居址は調査区中央東寄りに位置しC-2グリット内に存在する。2号土坑と重複するが1号土坑と同様に本住居址と関係はないと思われる。規模は南北4.4m、東西3.2mを測り平面プランは長方形を呈する。壁高は15~20cm程で立ち上がり、床面は全体的に平坦で柔らかいが中央部で堅く締まっていた。床面積は約14.1m²を測る。柱穴は確認されなかった。住居址主軸方位N-90°-Eである。

カマドは東壁南コーナー付近に位置し残存状態は比較的良く、袖石は安山岩系自然石の上部を欠損し使用している。煙道は短く燃焼部は焼けていないがカマド周辺覆土中に焼土・灰・炭化物を含む。

出土遺物はカマド周辺から多く検出された。

d 4号住居址(第10図 図版2)

4号住居址は、調査区西南隅に位置し、C-0, D-0グリットにかけて存在する。5号住居

址と重複関係にあるが、切り合い関係ははっきりしなかった。規模は調査区域外の部分が多く、推定で南北4.0m東西は不明である。平面プランは長方形を呈すと思われる。壁高は15cm前後で立ち上がり、床面は柔らかく平坦である。柱穴は確認されなかった。住居址主軸方位は推定でN-90°-Eと思われる。

カマドは焼土範囲の確認のみで明確には検出されなかつたが、推定で東壁北よりに位置していたと考えられる。

出土遺物は、本遺跡中最も多く検出された。

e 5号住居址（第10図 図版3）

5号住居址は調査区西南隅に位置し、D-0グリット内に存在する。4号住居址と重複関係にあるが、切り合いははっきりしなかつた。規模は南北4.0m、東西は推定で2.7mを測る。平面プランは、長方形を呈する。壁高は、20~22cm程を測り床面は平坦で柔らかい。柱穴は確認されなかつた。住居址主軸方位はN-86°-Eである。

カマドは東壁中央部に位置し残存状態はさほど良くなかつた。袖石・天井石等は検出されなかつた。煙道は長く、燃焼部、煙道は焼けており覆土中に焼土・灰・炭化物等が層状に堆積していた。カマド周辺床面から炭化物・灰等が多く検出された。

出土遺物はそれ程多くない。

f 6号住居址（第4図 図版3）

6号住居址は調査区西壁に位置し、B-0グリット内に存在する。1号住居址と重複関係にあり、切り合いは明確でない。規模は推定で南北3m前後、東西は調査区域外であるため不明。平面プランは長方形と思われる。壁高は10cm前後で立ち上がるが明確さを欠く。床面は平坦で柔らかい。所々に焼土痕があり、数軒の住居が重複関係にあったと思われるが、焼土も微少で原形はとどめていない。また、柱穴は確認されなかつた。住居址主軸方位は、N-80°-Eで1号住居址と同一方位である。

カマドは東壁中央付近に位置し、残存状態は良くない。煙道は短く覆土中に焼土を含む。

出土遺物は少なく数片の破片が検出された。

g 1号土坑（第6図 図版1）

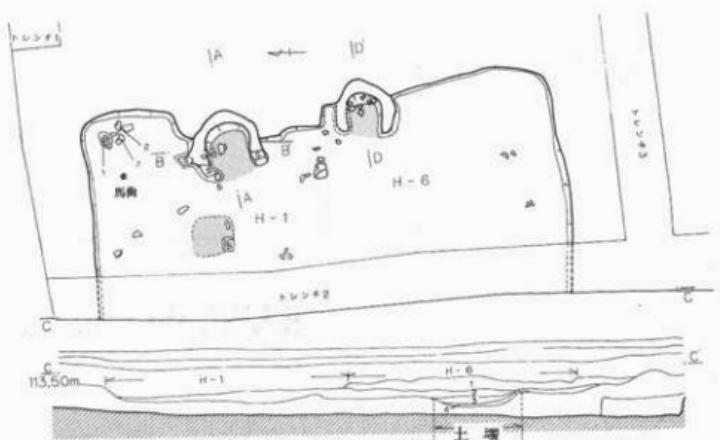
1号土坑は、1号住居址西壁の一部を切り重複している。平面プランは長方形で、規模は南北1.35m、東西1.65m、深さ60cmを測る。底部は平坦で柔らかい。覆土は3層に分けられる。

出土遺物は検出されなかつた。年代的には新しいものと思われる。

h 2号土坑（第8図 図版2）

2号土坑は、1号土坑と同様に、3号住居址と重複関係にある。平面プランは円形で、規模は直径1m、深さ60cmを測る。底部は平坦で柔らかい。覆土は2層に分けられる。

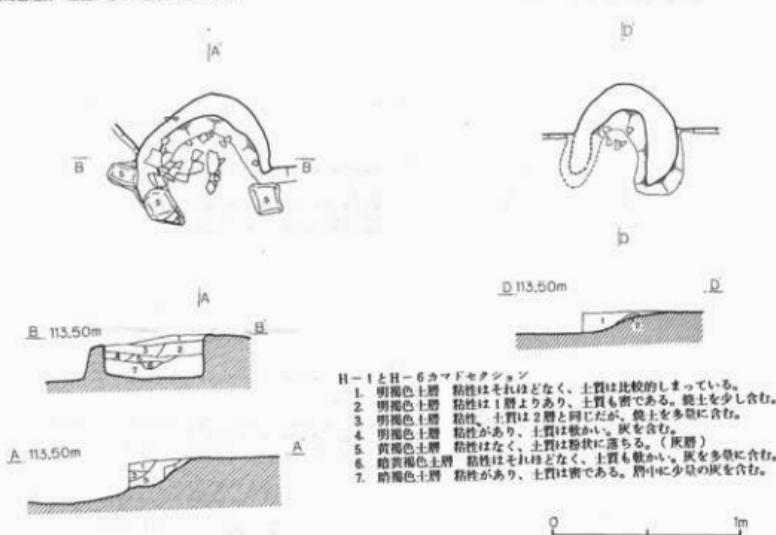
出土遺物は検出されなかつた。年代的には1号土坑と同様新しいものと思われる。



西壁セクション

- I 明褐色上層 売性はそれ程なく、土質は密である。
- II 明褐色土層 売性は1層より有り、土質は軟かい。FPとBPを含む。
- III 暗褐色土層 売性は、土質はⅡ層よりもありFPを含む。
- IV 黄褐色土層 売性はなく、土質は堅い。砂混入。
- V 暗褐色土層 売性があり、土質は軟かい。
- VI 灰褐色土層 売性はあり、土質は軟かい。
- 7. 底褐色土層 売性は2層とかわらないが、鉄分の付着がみられる。
- 8. 黑褐色土層 売性はあり、土質は軟かい。
- 9. 紫褐色土層 売性があり、土質は密である。

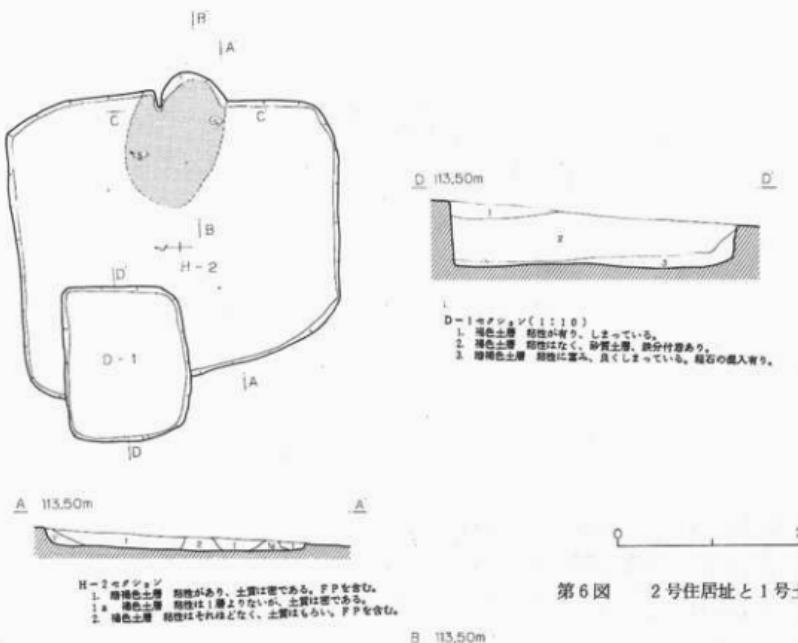
第4図 1号・6号住居址



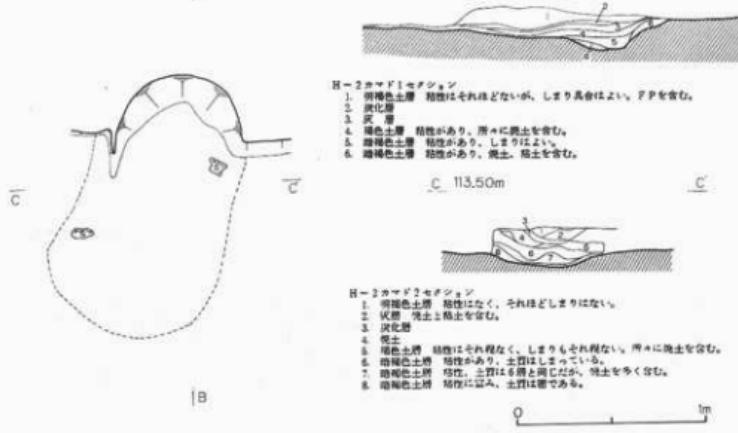
H-1とH-6カマドセクション

- 1. 明褐色上層 売性はそれほどなく、土質は比較的しまっている。
- 2. 明褐色土層 売性は1層より有り、土質も密である。鐵土を少し含む。
- 3. 明褐色土層 売性。
- 4. 明褐色土層 売性があり、土質は軟かい。灰を含む。
- 5. 黄褐色土層 売性はなく、土質は軟かい。灰を多く含む。
- 6. 黑褐色土層 売性はそれ程となく、土質も軟かい。灰を多量に含む。
- 7. 暗褐色土層 売性があり、土質は密である。沿中に少度の灰を含む。

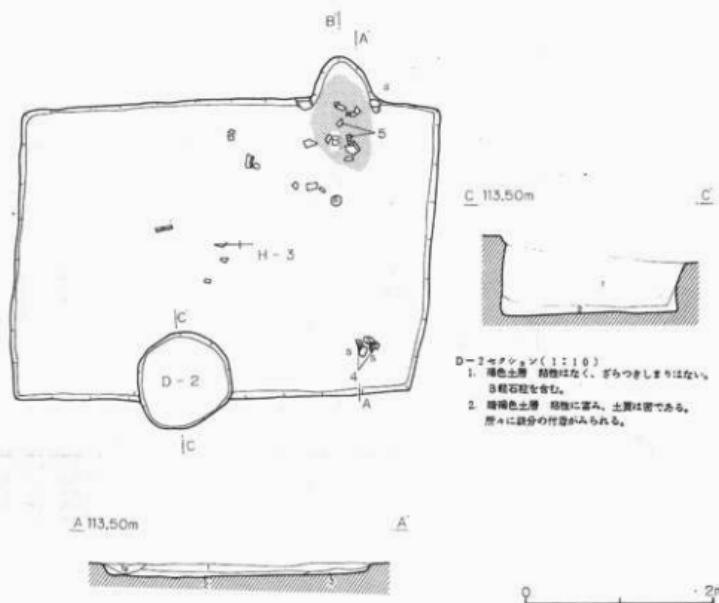
第5図 1号・6号住居カマド



第6図 2号住居址と1号土坑



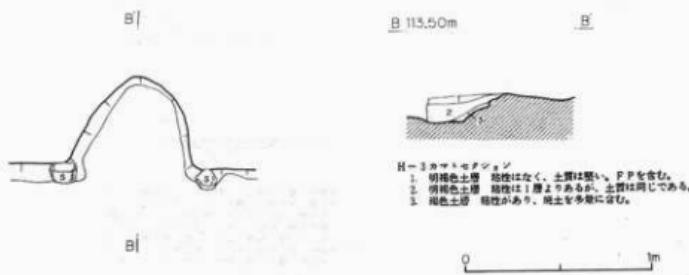
第7図 2号住居カマド



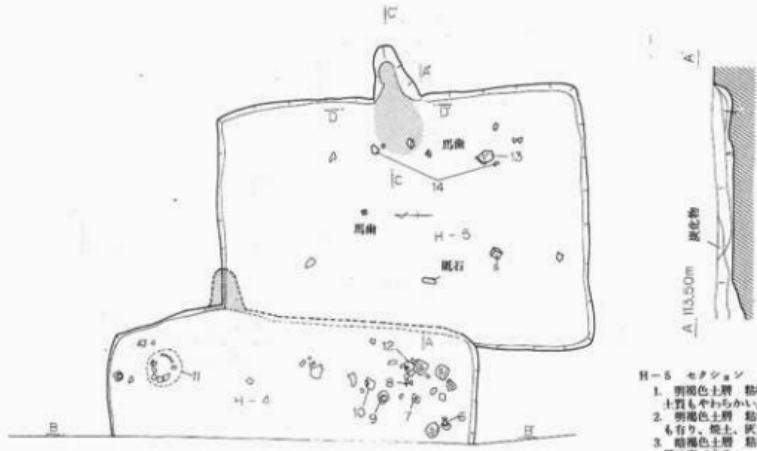
H-3 セクション

- 褐色土層 粒性は少しあり、土質はそれほどしまってない。所々に FP が含まれる。
- 暗褐色土層 1層と粒性は同じだが、土質は少ししまっている。
- 暗褐色土層 粒性があり、土質はしまっている。FP はそれほどみられない。
- 褐色土層 1層と同じだが、土質、炭を含む。

第8図 3号住居址と2号土坑

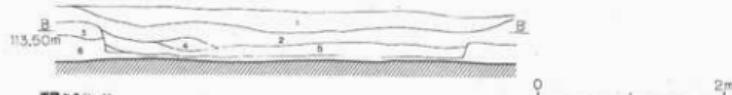


第9図 3号住居カマド



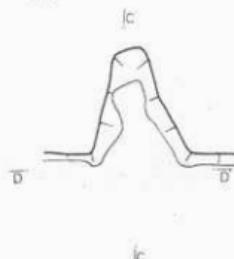
H-5 セタショソ

- 明褐色土層 粒性はそれ程なく、土質もやわらかい。FPを含む。
- 明褐色土層 粒性は1層よりも硬く、土質は堅かしい。
- 明褐色土層 粒性は1層よりも有り、板土、灰を含む。
- 崩落土層 粒性が有り、土質は密である。



第10図 4号・5号住居址

- 西壁セタショソ
- 明褐色土層 粒性はそれ程なく、土質は堅である。
 - 明褐色土層 粒性は1層よりも硬く、土質は堅かしい。FPとB Pを含む。
 - 暗褐色土層 粒性は1層よりも有り、FPを含む。
 - 褐色土層 淬化物と崩土を層状に含む。粒性は2層と同程度。
 - 褐色土層 粒性は有り土質は軟かい。崩土粒、黄化物を含む。
 - 深褐色土層 粒性に富み、土質は密でしまっている。FPを含む。



- H-5 カマドセタショソ
- 明褐色土層 粒性はそれ程なく、土質も軟かい。FPを含む。
 - 褐色土層 淬化物と崩土を含む。粒性がある。
 - 褐色土層 粒性はあり、土質は軟く、灰を多量に含む。
 - 褐色土層 粒性があり、土質は軟く、崩土と灰を含む。
 - 褐色土層 粒性に富み、土質は密で堅かしい。粗土を含む。
 - 深褐色土層 粒性があり、土質は密でしまっている。
 - 深褐色土層 5層と粒性、土質は同じだが粗土を含む。

第11図 5号住居カマド

2. 観察表

壇走塚 II 置跡赤出土・遺物観察表

法量の()は推定値

No.	出土位置	種類	法量 (cm)	胎土・焼成度	色調	器形の特徴	(内・外)底形	遺存状況	図版番号
1	H1-1	環須恵器	□ 11.1 底 5.1 高 3.0	粗砂粒を含む 還元 軟質	灰白色	体部左右対称性を欠く。縁部から口縫部にかけ肥厚する。	(外)体部ナデ調整。底部右回転糸切り後調整。 (内)底部・体部ナデ調整	2/3 残	4
2	H1-5	環須恵器	□ (12.1) 底 (6.6) 高 4.8	粗砂粒を含む 還元 軟質	灰白色	体部は渦曲気味に立ち上がる	(外)体部ナデ調整。底部右回転糸切り未調整。 (内)底部・体部ナデ調整	1/2 残	4
3	H1-8	塊須恵器	□ (12.0) 底 7.2 高 5.5	粗砂粒を含む 還元 軟質	浅青褐色	縁部から口縫部にかけ渦曲気味に立ち上がり外反。貼付け高台。	(外)体部ナデ調整。底部高台貼付け後ナデ調整。 (内)底部・体部ナデ調整	1/3 残	4
4	H3-1	塊瓦輪陶器	□ (15.2) 底 9.2 高 7.8	密 還元 硬質	灰白色	体部は丸味をもってはり、口縫部小さく外反。貼付け高台。	(外)脚部、腹部回転へラ削り調整。底部高台貼付け後ナデ調整。 (内)底部・体部ナデ調整	1/3 残	4
5	H3-3	塊灰輪陶器	□ 13.8 底 7.8 高 4.2	密 還元 硬質	灰白色	体部はふくらみを持ちながら開き、口縫部小さく外反。貼付け高台。	(外)体部ナデ調整。底部高台貼付け後ナデ調整。 (内)底部・体部ナデ調整	2/3 残	4
6	H4-1	塊須恵器	□ 13.7 底 5.7 高 5.1	良 還元 軟質	灰褐色	腹部は丸味を持ちながら立ち上がり口縫部は開き気味に外反。難な貼付け高台。	(外)体部ナデ調整。底部右回転糸切り痕有り。内外面素焼き吸着。 (内)底部・体部ナデ調整	ほぼ完形	4
7	H4-3	瓦塊須恵器	□ 9.6 底 4.3 高 2.9	良 還元	灰色	耳部圧痕有り。耳部指による折り曲げ。	(外)体部ナデ調整。底部右回転糸切り未調整。 (内)底部・体部ナデ調整	完形	4
8	H4-5	环須恵器	□ (14.0) 底 5.5 高 4.8	やや良 還元	灰色	腹部は丸味を持ちながら立ち上がり、口縫部は開き気味に外反。難な貼付け高台。	(外)体部ナデ調整。底部右回転糸切り後調整。内外面素焼き吸着。 (内)底部・体部ナデ調整	2/3 残	5
9	H4-9	塊土師器	□ (14.5) 底 6.5 高 5.8	良 酸化	明褐色	腹部は丸味を持ちながら立ち上がり、口縫部は開き気味に外反。難な貼付け高台。	(外)体部ナデ調整。底部右回転糸切り痕有り。 (内)底部・体部ナデ調整	2/3 残	5
10	H4-10	塊須恵器	□ (13.9) 底 5.0 高 4.5	やや良 還元 軟質	灰褐色	体部左右対称性を欠く。腹部は丸味を持ち立ち上がる。難な貼付け高台。	(外)体部ナデ調整。腹部に指紋によるナデ痕。底部右回転糸切り痕有り。 (内)底部・体部ナデ調整	2/3 残	5
11	H4-17	塊土師器	□ 18.9 底 21.9	粗 砂粒を含む 酸化 軟質	にぶい橙	腹部に最大径を持ち、口縫部は「コ」の字状口縫を有す。	(外)肩部～腹部にかけ横位へラ削り 腹部～底部にかけ斜位へラ削り (内)横位のへラナデ	ほぼ完形	5
12	H4-24	环須恵器	□ 13.2 底 6.4 高 4.0	粗 小體を含む 還元 軟質	灰白色	体部は直線的に立ち上がり口縫部で外反。	(外)体部ナデ調整。底部右回転糸切り痕有り。内外面全体素焼き吸着。 (内)体部・底部ナデ調整	完形	5
13	H5-8	盤面須恵器	□ (16.0) 底 (15.5) 高 4.0	密 還元 硬質	灰色	底部から縁部にかけ器内は薄くなり、開き気味に立ち上がる。	(外)口縫部ナデ調整。底部回転へラ削り痕有り。 (内)底部・体部ナデ調整	1/3 残	5
14	H5-9	塊土師器	□ 12.4 底 3.5	粗 砂粒含む 酸化	橙色	底部は渦曲し、口縫部直立気味に立ち上がる。	(外)口縫部ナデ調整。底部・体部へラ削り整形。 (内)口縫部から体部にかけナデ調整	ほぼ完形	5
15	試掘1	塊須恵器	□ (6.5) 底 5.2 高 4.9	粗 砂粒含む 還元 軟質	暗青灰色	底部から腹部にかけ渦曲気味に立ち上がる。難な貼付け高台。	(外)腹部指による整形後ナデ調整。腹部右回転糸切り痕有り。 (内)底部・体部ナデ調整。底部渦巻痕有り。	1/3 残	
16	試掘2	塊須恵器	□ 13.7 底 5.2 高 4.9	粗 還元 軟質	灰色	器形はいびつで難な作りである。高台も難に貼付け。	(外)口縫部ナデ調整。底部から体部にかけ添み有り。 (内)底・体部ナデ調整。底部凹凸有り	2/3 残	

(注)住居址図中の土器番号は、観察表の番号と一致する。

第五章　まとめ

今回の発掘調査により確認された遺構は、住居址6軒、土坑2基であった。時期的内訳は住居址は平安期のものであり、土坑は出土遺物もなく時期は不明であるが、土層から見て本遺跡との関連はないと思われる。

本遺跡の住居址の在り方についてはいくつかの特徴を上げることができる為以下述べてみたいと思う。

第1に1号住・6号住、2号住・3号住、4号住・5号住とそれぞれの住居単位に分けることができ、各住居単位は遺物を多く出土するものと少ないものとに分けることが出来る。多いものは1号住、3号住、4号住で、少ないものは、5号住、6号住であり、2号住に至っては遺物は全く検出されなかった。

第2には、遺物を多く出土する住居は少ない住居に隣接、又は接して存在し北西方向に位置する傾向にある。

第3に検出された遺物は9世紀後半から10世紀前半にかけてのものが多く、各住居は同時期的に存在し生活空間を形成したと思われる。

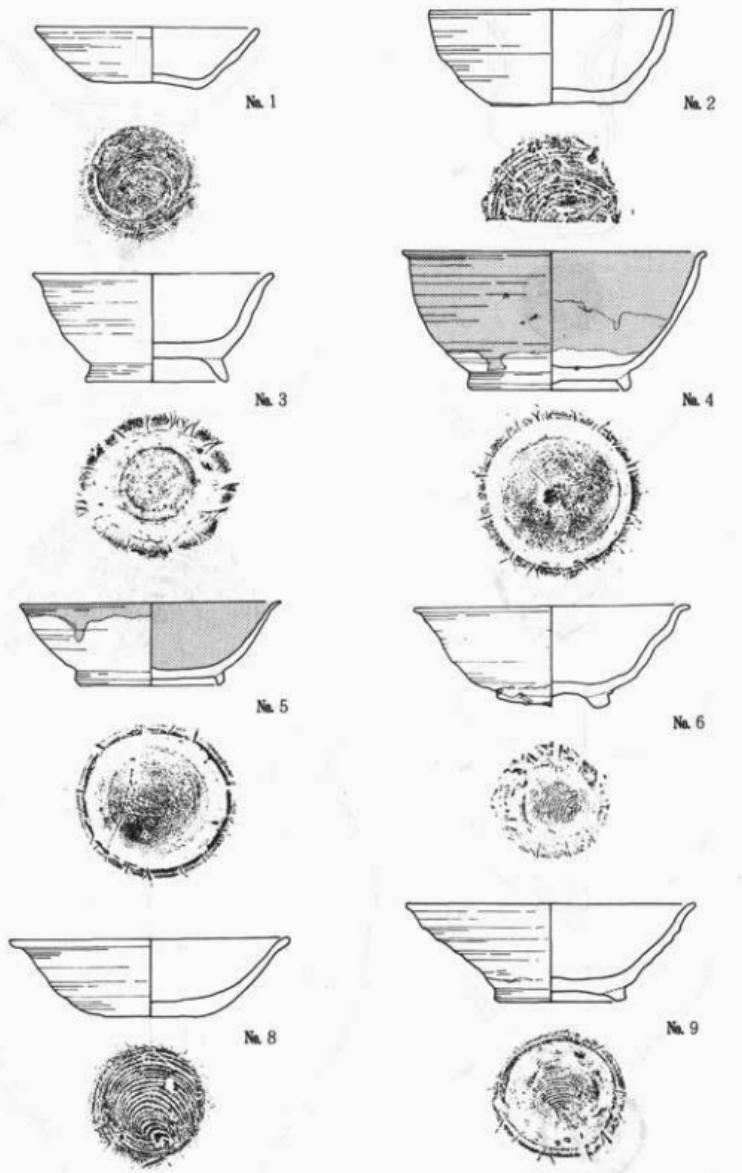
第4には出土遺物が少ない住居においても焼土を多く残している。

以上の点から考え、本遺跡の住居址は建て直しによる住居址と考えた方が妥当ではないかと思われる。つまりカマドの火を絶やさず、從来の生活を維持しながら新しい住居を作り新築した後移動する方法がとられていたと推察できる。この住居址の在り方は、清里陣場遺跡（注1）の建て直し住居の在り方に合致しているため興味深い。しかし移動方向について本遺跡では2号住から3号住への移動は南に移動しており、他の住居と方向を異にしているため今後方向性については他の調査例も含め検討が期待される。なお建て直しの新旧関係は6号住→1号住、2号住→3号住、5号住→4号住という関係にある。最後に開発行為者である（後藤ノボル氏）と御指導戴いた方々また調査に参加した方々に深く感謝しここにまとめと致します。

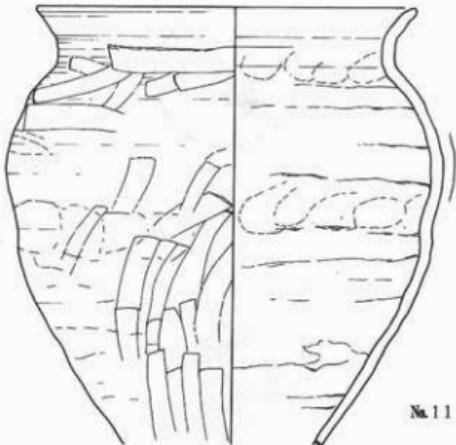
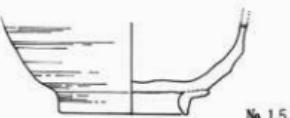
<注>

- 1.「清里・陣場遺跡」1982年(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

実測図 1

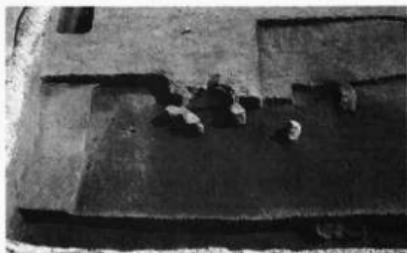


実測図 2





H-1 遺物出土状況（西より）



H-1（西より）



H-1 カマド内遺物出土状況（南より）



H-1 カマドセクション（南より）



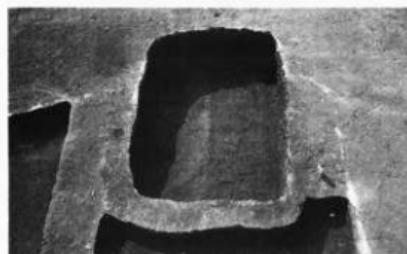
H-2 と D-1（西より）



H-2 カマドと炭化物（西より）



H-2 カマドセクション（南より）



D-1（東より）

図版2



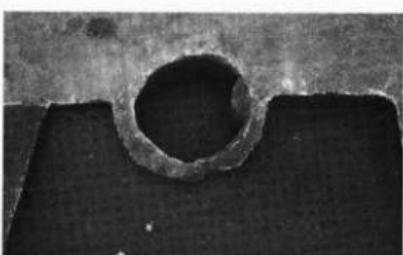
H-3 遺物出土状況（西より）



H-3 と D-2（西より）



H-3 カマド（西より）



D-2（東より）



H-4 遺物出土状況（西より）



H-4（西より）



H-4 遺物出土状況（西より）



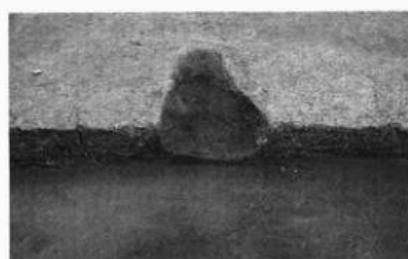
H-4 遺物出土状況（西より）



H-5 遺物出土状況（西より）



H-5 (西より)



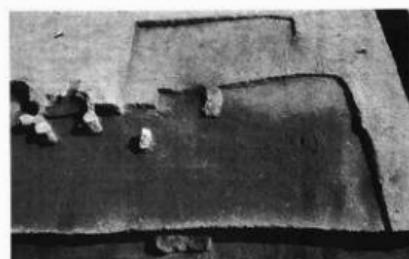
H-5 カマド（西より）



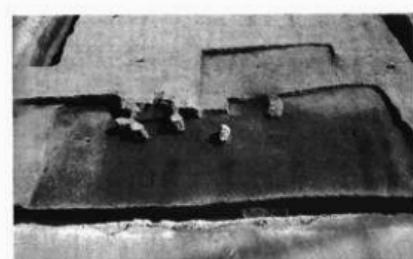
H-5 カマドセクション（南より）



H-6 遺物出土状況（西より）



H-6 と H-1 (西より)



H-1 と H-6 全体（西より）



遺跡全景（北より）

图版 4



No. 1



No. 2



No. 3



No. 4



No. 5



No. 6



No. 7



No. 7



No. 8



No. 9



No. 10



No. 11



No. 12



No. 13



No. 14

堰 越 II 遺 跡

昭和63年6月15日 印刷

昭和63年6月20日 発行

編集 スナガ環境測設株式会社

発行 前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

印刷 (有) サクラヤ印刷所

